

Title	西洋史概説(内藤智秀著, 教育研究会発行)
Sub Title	
Author	近山, 金次(Chikayama, Kinji)
Publisher	三田史学会
Publication year	1935
Jtitle	史学 Vol.14, No.1 (1935. 4) ,p.172- 172
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19350400-0172

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

かりであつて、(22cm×13.5cm)六四七頁、ギゾーとGasparrin夫人などの肖像畫、及び三通の手紙が寫眞版になつて掲載されており、吾々に一層の興味と親しみを感じしめる。(藤田寅一)

西洋史概説 (内藤智秀著)
教育研究會發行

人道主義を容れ、傳説を重んじ、社會的平和發展を目的とする民主主義を標榜する著者は此處にその歴史的智識を傾けて西洋文明を概説し、以てその世界國家建設の遠大な希望を謙讓な態度で披瀝してゐる。

先づ之を古代、中世、近世、現代の四篇に分ち、古代篇はローマまで、中世篇は北米合衆國の獨立まで、近世篇はフランス大革命に筆を起して世界大戦前に至るものであり、時代區劃の上からは何等特徴を見ないが、政治社會的變遷に重點を置いたその記述法は期せずしてペリクレス時代の描寫を分割させ、或はアレクサンドル大王時代の章にヘルシヤ戰役やペロポネス戰役を説く結果にまで及んでゐる。然しながら又他面に於てそれはギリシヤ、ローマの文物制度をそれぞれ巧みに包括し、比較的明瞭な印象を讀者に與へてくれる。著者の最も得意とする所は近東諸國の變遷にあり、従つてバルカン、トルコを中心とする蘊蓄を傾けて東方問題を論ぜらるるあたりが、斷然類書を凌ぎ、本書の最も優れた方面であらう。

最後に國際聯盟の新任務を説き、佛外相ブリアンの提唱したヨーロッパ聯盟にも言及し、黃禍論と白禍論を述べて大アジア主義の發生を論じ、民族主義による自己の立場を表明して結語とする。

全卷七七九頁の大冊、脱字、誤字、異説もないではないが、ともすれば不足勝な我等の西洋史に關する知識の理解と普及に對し資する所は決して少くはないであらう(近山金次)。

世界大戰原因の研究 (鹿島守之助著)
岩波書店刊行

大戰前の同盟條約の多くに『何等挑發に基かずして攻撃せられんとするとき』の句が含まれてゐる如く、戰爭にあたり、交戰國の何れが挑發せしかは問題となる所であり、交戰國何れも對手國の挑發により、やむなく應戰したものであると世界に認めさせんと努力するのである。一九一四年の世界大戰勃發の時にも英佛露獨逸等は外交文書を發表し、その對手國の非をならしたのである。この結果として、その後しばらくと云ふものは各國の學者、政治家は互に對手國のみに開戰の責任ある如くに論じたのであるが、漸次戰爭の興奮がさめるに従ひ、多くの學者は一方のみにその責任を歸することの非なることを見出し、その責任は兩方の側にあることを認め出したのである。鹿島氏も又この責任は兩方の側にて負ふべきものであるとの立場をもつて本書は書かれてゐるのであるが、然し結論に於て、ドイツロシヤの責任を比較された時にドイツ及びオーストリアがその和戰何れかを決する地位にあり、之を決する權限の存する所に最大の責任も亦存すると書かれてゐるので、全書を通じて、大體に於てドイツ側を非とした調子が見られるのである。

世界大戰の間接の主要原因として多く三國協商三國同盟の對立を云ふのであるが、即ち兩者の對立に責任ありとするのであるが、